

教育学部

前期日程

令和9年度入学試験問題

総合問題

I 次の文章を読んで、以下の問1～3の設問に答えなさい。（配点150点）

語彙発達の初期においては、子どもにとっての単語は、一概に「名詞」だとか「モノ語（モノを指示すると思われる単語）」だとはいえない、なにか別の独特な単語である可能性があります。(a)子どもの頭のなかには、大人とは異なる独特な意味の世界が広がっているかもしれない。このような発想は、実は古くから議論されていたことでもあります。たとえば、子どもの発話は、「名詞」「動詞」「形容詞」のように切り分けることはできず、むしろ「名一形一動一詞」のような複合的なものなのではないかといった洞察は、既に1世紀以上も前から主張されてきました。「熱い」という単語は一見すると形容詞ですが、子どもにとってはモノの属性としての（熱い）という意味だけではなく、〈スープ〉〈ストーブ〉などの意味も含んでいるのではないかと、といった指摘もあります。さらに踏み込んだ議論として、子どもにとっての初期の単語は、その単語が名詞など特定の種類の単語に見えたとしても、実際には子ども自身の体験をもとに形成された、全体的で未分化な〈出来事〉全体を意味しているのではないかと、という主張が挙げられます。たとえば、子どもにとっての「クック」という単語の意味は〈靴〉ではなくて、〈靴を履く〉とか〈お出かけする〉という行為まで含んだものではないかと、いうものです。同じように、(b)「いないいないばあ」のなかで「ばあ」の部分を子どもが発話したとしても、それは〈出てきた!〉という特定の動きや行為だけをあらわしているのではなく、遊び相手である大人や、そのときに使っていたおもちゃ、遊びのなかの感情などを含んだ〈全体としての状況〉を意味するかもしれません。考えてみれば、子どもが日常的に触れるモノの多くは、ある特定の場面や行為に埋め込まれた、いわば「盛り合わせ」のようなものになっています。〈ボール〉は〈投げる〉と結びついているし、〈コップ〉は〈飲む〉と結びついているし、〈絵本〉も〈めくる〉や（赤ちゃんにとっては）〈噛む〉と結びついているといえそうです。したがって、子どもにとってのモノの概念は、行為や出来事からすっぱりと切り離されたものではなく、むしろこれらと分かちがたく合体したものである可能性があります。実際に、ある子どもは「ボール」というモノ語を言えるようになるよりも先に、投げる行為によってボールを示そうとしたり、「ポンテンノ」など行為に関わるオノマトペを表出したりすることで、「ボール」について表現しようとしたという報告があります。このように考えてみると、「クック」「コップ」といった単語も、大人にとっての単語と同じように「モノ語」と呼ぶのは実は誤りで、何か別の意味をもった単語なのかもしれません。

単語の意味はもともとは未分化であるということをもっと積極的に主張するにはどうしたらよいのでしょうか？その場合も、子どもの様子をつぶさに観察することで手がかりが得られることがあります。たとえば、ある12ヶ月の子どもは「お風呂」という単語を聞いて、お風呂場に行って、服を脱ごうとし、蛇口をひねろうとした……というように、お風呂に関わる一連の行為を表出したという報告があります。筆者自身も、ある保育園の1歳児クラスで先生が「ごはん」といったときに、園児のDちゃんがテーブルの方にやってきて椅子に座り、ワクワクした様子で先生の方を見て待つそぶりを見せている場面に遭遇したことがあります。1歳台の子どもの場合、単語の理解が出来事と分かちがたく結びついていることが示唆されます。これらの状況証拠にとどまらず、もっと直接的に子どもにとってのモノ語の理解を調べて、初期の

単語の意味が未分化なのかどうかを調べた研究があります。この研究によれば、1歳半ごろの子どもたちは、「靴を履く」場面であれば「クック」という単語の意味を適切に理解できたのに、「靴を手で持って胸の前でこする」のような、モノと行為とがうまく噛み合わない場面になると、「クック」の意味がわからなくなっていました。つまり、「クック」という単語には〈靴〉というモノだけでなく、〈履く〉という行為の意味も分ちがたく含まれていることが示唆されたのです。一方で、2歳ごろになると、子どもはモノと行為とを別々にとらえて、「クック」は「どのように使われているか」とは関係なく、あくまでもモノとしての〈靴〉をあらわしていると理解できることが明らかになりました。

(萩原広道『子どもとめぐることばの世界』ミネルヴァ書房、2024、pp. 104-108 より。改変あり。)

問1 下線部(a)に「子どもの頭のなかには、大人とは異なる独特な意味の世界が広がっているかもしれない」とあるが、子どもは初期の単語の意味をどのように捉えている可能性があるか。本文全体を読んで、本文中の具体例を示しながら150字以内で要約しなさい。

問2 「いないいないばあ」遊びに関する、下線部(b)についての「いないいないばあ」遊びにおける〈全体としての状況〉の具体例を考え、250字以内にまとめなさい。

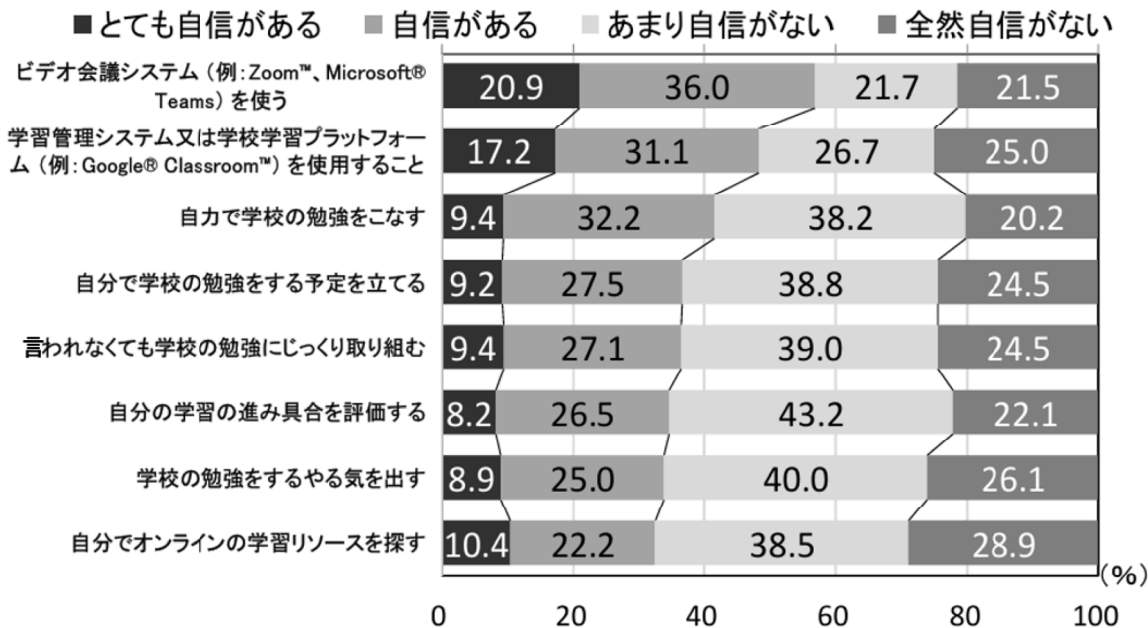
問3 あなたが小学校の教師として教育に臨む場合に、どのようなことを重視するか、問題文の内容を参考に、自身の経験なども踏まえて、あなたの考えを400字以内で論じなさい。

II 次のグラフを読んで、以下の問1・2の設問に答えなさい。(配点 150 点)

資料は、OECD 経済協力開発機構が 2022 年に 15 歳の生徒を対象に実施した学習到達度調査「PISA2022」について、国立教育政策研究所が、日本の調査結果を整理したものの一部である。

生徒質問調査 問61 自律学習と自己効力感(日本)

「今後、あなたの学校が再び休校した場合、以下のことを行う自信はどれほどありますか。」



国立教育政策研究所 OECD 生徒の学習到達度調査 PISA2022 のポイント(16 頁)

https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/2022/01_point_2.pdf

問1 Aさんはこのグラフに示されている8つの質問項目を2種類に分類し、それぞれに課題を考えました。Aさんと同じようにあなたも質問項目をその内容に基づいて2種類に分類し、アンケート結果に基づいて課題を考え、そのように考えた理由を、分類1、分類2についてそれぞれ300字以内で説明しなさい。

問2 問1を踏まえて、あなたならどのように課題の改善を図るか。児童・生徒の立場ではなく、教師の立場を想定して300字以内で論じなさい。

教育学部

令和9年度入学試験問題

総合問題

出題意図及び解答例

I

<出題意図>

本問題は、教育に関する専門用語や特定の知識の有無を問うものではありません。提示された文章をもとに、自分なりに課題を見出し、これまでの学習や経験を踏まえながら、筋道を立てて具体的に表現する力を評価します。また、正解が一つに定まる問題ではなく、多様な視点や考え方をもとに、根拠をもって説明しようとすることを重視します。

問1は、本文を正確に読み取り、内容の要点を適切に捉える力をみています。

問2は、本文の内容を踏まえながら、自分の考えを広げ、根拠をもって論理的に説明する力をみています。

問3は、教育に対する関心や問題意識をもとに、自分の考えを具体的に表現する力をみています。

<解答例>

※ 以下は、あくまで高い評価を得られる記述の一例（モデル）です。これとは異なる視点やアプローチからの解答であっても、論理的かつ具体的に論じられていれば、多様な考え方を積極的に高く評価します。

問1

子どもにとって、初期の単語の意味はモノや行為などと明確には区別されていない。例えば、「クック」という単語の意味は〈靴〉ではなくて、〈靴を履く〉とか〈お出かけする〉という行為まで含んだものであり、全体的で未分化な出来事全体を意味している可能性がある。 <124字>

問2

いないいないばあ遊びでまず大事なものは誰が誰に行くかである。同じくらいの年の友達と遊んでいる場合は、「ばあ」の主体は自分である可能性が高いが、大人と遊んでいる場合は大人が自分に行く「ばあ」を想定しているかもしれない。前者の場合は、いないいないばあ遊びとしての行為に加えて、友達の喜ぶ顔や、友達に対して「一緒に遊ぼう、遊びたい」という感情が、後者の場合は大人に対して「いないいないばあやって！」という要求感情や、以前に遊んだいないいないばあ遊びの記憶の共有が意図されているかもしれない。〈241字〉

問3

子どもの発する言葉は、言葉自体が本来表す意味を超えた、名一形一動一詞のような全体的な状況を含んでいる可能性がある。このことは、子ども達が発する言葉や目の前で行っている行為が、その時の子ども達の気持ちの全てを表しているわけではないことを示している。子どもが教室の場を乱す行動をしていると教師は注意したくなってしまうと思うし、実際に小学校の時にふとした発言でよく友達とけんかになる子がいたが、この文を読んで、それはその子の本当の気持ちではなかったかもしれないと考えた。小学校の教師として教育に臨むとしたら、まずは子どもをよく見て、よく話して、子どもの本当の気持ちを理解することが大事だと思う。国際化が進んで母語が日本語でない子ども達も多いが、そのような子ども達はなおさら周りに気持ちを伝えることが難しいと思う。このことから、子どもをよく見て理解する姿勢が重要だ。〈380字〉

教育学部

令和9年度入学試験問題

総合問題

出題意図及び解答例

II

<出題意図>

本問題は、教育に関する専門用語や特定の知識の有無を問うものではありません。提示された文章や資料をもとに、自分なりに課題を見出し、これまでの学習や経験を踏まえながら、筋道を立てて具体的に表現する力を評価します。また、正解が一つに定まる問題ではなく、多様な視点や考え方をもとに、根拠をもって説明しようとすることを重視します。

問1は、資料を正確に読み取り、情報を整理して課題を適切に捉える力をみています。

問2は、資料の内容を踏まえて自分の考えを広げ、教育に対する問題意識をもとに、根拠をもって論理的に説明する力をみています。

<解答例>

※ 以下は、あくまで高い評価を得られる記述の一例（モデル）です。これとは異なる視点やアプローチからの解答であっても、論理的かつ具体的に論じられていれば、多様な考え方を積極的に高く評価します。

※ 以下の解答例に含まれる用語は理解を助けるためのものであり、これらの用語の知識そのものを問うものではありません。

問1

分類1

ビデオ会議システムを使うことや、学校の学習用システムを利用すること、自分でオンラインの学習教材を探すことへの回答から、生徒がICTを十分に活用できていない様子が分かる。例えば、ビデオ会議システムの利用に「とても自信がある」と答えた生徒は約21%、学習用システムの利用では約17%にとどまった。この結果から、多くの生徒がICTを学習に主体的に活用する段階に至っていないことがうかがえる。これは、生徒が

ICT を使って学びを広げる経験が十分でなく、学校での指導や日常的な活用機会が不足していることを示している。端末や通信環境は整ってきたが、使いこなすための段階的な支援が十分でないことが課題である。(296 字)

分類 2

自力で学校の勉強を進めることや、学習の計画を立てること、言われなくても学習にじっくり取り組むこと、自分の学習の進み具合を振り返ること、勉強へのやる気を高めることについて、「とても自信がある」と答えた生徒はいずれも 10%未満にとどまっている。これは、日本の学校教育が依然として教師主導で進められる傾向が強く、生徒が自ら学習を管理し評価する機会が限られていることを示している。そのため、自律的に学びを進めたり、課題を探究したりする学習を支えるカリキュラムや学習過程が十分に実現されていない点が課題である。その結果、教師や保護者の指示がなければ学習に取り組めない子供が育っている可能性がある。(293 字)

問 2

まず、クラウドを活用し、授業や宿題を学習内容や課題を管理する仕組みにまとめることを生徒に伝える。その上で、連絡や課題の配付・提出、コメントを一つの場所で行う。また、複数人で資料を作る活動や、ビデオ会議を使った発表や質疑応答の練習を定期的に行う。そのために必要な情報活用能力を育てるため、インターネットでの調べ方を指導し、情報の正しさや著作権についても短時間で継続的に扱う。さらに、自律的に学ぶ力を高めるため、週ごとに「目標→計画→実行→振り返り」をチェックリストや学習記録で見えるようにし、教師が助言する。加えて、締切の通知や生徒の理解に応じた課題設定、定期的な面談で学習の継続を支援する。(295 字)